

(第3種郵便物認可)

サイ・テク 知と技の発信 こらむ

[374]

埼玉大学・理工学研究の現場

■全ての始まりは84年前
 時は、1934年にさかのぼる。ル・エレクトリック社のキャサリ
 この年、2年前にノーベル化学賞リカ化学会誌に『水面上にできた
 を受賞した米国の物理化学者ア分子一層の膜状の組織体を、固体
 ーヴィング・ラングミュアは、世基板上に写し取る手法』として、
 界旅行がてら、東京大学理学部のラングミュア・プロジェクト法通
 鮫島實三郎教授の下を訪れる。称・LB法、この手法によって作
 この34年は、その初頭に、ラングられる薄膜状の分子組織体を、L
 ミュアの直弟子である、ジュネフ B膜と称する)を発表した年だっ



ふじもりのあつひろ 1974年生まれ。
 2002年3月埼玉大学大学院理工学研究科
 博士後期課程修了。博士理学。山形大学大
 学院助教を経て、11年4月より現職。専門は
 超薄分子組織膜の化学、高分子物性。

次は、「自分の名」で 大学院研究科 藤森厚裕准教授

た。34年時点では、この報告はま
 だ「予告報」の段階であり、世界
 がその詳細を知るのは、翌35年の
 ことになるはずだった。

■米国から東大、そして埼玉

に
 膠質化学(こつじつかがく・現
 在のコロナド化学)を専門として
 いた鮫島は、もちろん、そのとき
 既に、世界最高峰の化学系学術雑
 誌である、アメリカ化学会誌の記
 事を目にしていた。彼は、目の前
 のノーベル賞受賞者に尋ねた。「貴
 方の弟子の言つ、LB法とは、
 一体何だ?」。

2000年、米国のISI社現
 トムソン・ロイター社)から、各
 学問分野における学術論文の被引
 用件数最上位の研究者たちが発表
 された。ここに名を連ねた日本人
 研究者はわずか百三十数人。一説
 には、世界最上層トップ0.5%

ともいわれたこのランキング中
 に、選出の榮譽を受けた日本人の
 多くが旧帝国大学系に所属してい

た中で、埼玉大からたった1人、
 Kiyoshige Fukuda
 という名前が確認された。

■地方大学の「勝ち方」

28歳の福田が、講師の肩書で着
 任した当初、埼玉大には大学院が
 なかった。福田が52歳になつては
 じめて、修士課程が設置された。
 博士課程の設置は彼の退官2年前
 のことである。福田の業績は、そ
 のほとんどがたった1年間の卒業
 研究の後に集まつてしまつ、大学
 4年生と共に成し遂げられたもの
 だった。

福田の直系である中原弘雄教
 授は、筆者の直接の師である。師
 からは鮫島・福田らのエピソード
 をよく聞かされてきた。名譽

教授となつた福田の自宅に、筆者
 はたびたび通い、その肩をもみな
 がら、老師の話に何時間も聞き入
 った。福田名誉教授、そして中原
 名誉教授ももう、この世の人では
 ないが、彼らの存在なくしては、
 今の研究者としての自分は、在り
 得ない。

■世界中どこに行つても、『お前 は、フクダ・ナカハラの弟子』とな る。LB膜は本家本元だ』と、 認識される。帝大系の出身ではな い著者でも、「名門の出自」と認識 されるのは、ありがたい。研究の 知名度は、その規模でも人数でも 資金力で決まるものでもない、と いう実例であろう。しかし「LB」 も福田も中原も、「私の 名前ではない」。先人たちの築い た「地方大の勝ち方」を示し続け るには、次は私自身が自分の名で、 (例えば図に示すような)新しい 概念発信の使命を担っているのだ と自己に言い聞かせる毎日であ る。